

「けいはんな未来」懇談会
3年間の活動の締めにあたり

公益財団法人国際高等研究所
「けいはんな未来」懇談会

はじめに

国際高等研究所はけいはんな学研都市の「知の中核機関～知的ハブ」としての役割を果たすべく設立された。この街の建設の礎となった1978年の関西学術研究都市調査懇談会（通称「奥田懇」）の発足に際しては、1972年に発刊されたローマクラブの「成長の限界」が大きな影響を与えたとされる。これは現在でいう「持続可能な社会の構築」の必要性を訴えたものである。この街も街びらきから30年が経過し、その頃から課題視してきた地球温暖化、地球資源の枯渇、人口増加や環境破壊など人類と地球をとりまく課題はより深刻になってきており、30年後の社会においては今以上に様々な課題が顕在化していることが予想される。

このような状況の下、「何を研究するかを研究する」ために設立された国際高等研究所として、「けいはんな学研都市の30年後に向けたコンセプト」を構築するために英知を結集していくことが正にその使命であると捉え、2015年7月に「けいはんな未来」懇談会を設立した。メンバーには、産業、学術、行政からけいはんな学研都市の未来を語るに最も相応しい方々に参画を頂き、長期的な視点をもって議論を重ねることにした。この街が「サイエンスシティ」として、そして「文化の街」として、様々なジャンルの「知」を結集し、科学技術から産業に至るラインだけでなく、都市のあり方、住民の幸福な暮らしのあり方なども考えながら、30年後のモデルとなる学研都市のあり方を提言していきたい。

30年後のけいはんな学研都市が、サイエンスシティとしての繁栄にくわえ、市民が安寧・幸福に暮らす持続可能な街であるためには、今、どこに着目し、何をなすべきであろうか。2016年度に設置した専門検討部会では、研究・開発、産業、文化・芸術、教育、住民生活、都市基盤の観点から検討を進め、30年後のけいはんな学研都市のるべき姿を6つに集約し、その実現のための課題と戦略を提示した。さらに3年間の活動の締めにあたり懇談会本会と専門検討部会のメンバーが合同で実施した議論を通して、これから街のあり様についてさらに検討し、実現に向けて推進していくべきことについての複数の提言がなされた。

「けいはんな未来」懇談会 3年間の活動の締めにあたり

けいはんな学研都市は、その街びらきから 30 年が経過し、都市としての整備は随分と進み、立地機関数や人口も増大してきた。それに伴い解決されてきた課題は数多いが、根源的な部分でさらに解決されていかねばならないことも残存しているものと思料される。

「けいはんな未来」懇談会では、3 年間にわたり、本部会および専門検討部会において多角的、専門的な視点からけいはんな学研都市の 30 年後のあり様について議論、検討を行ってきた。今般、懇談会本部会と専門検討部会のメンバーが合同で実施した議論を通して、これからのお街のあり様についてさらに検討し、実現に向けて推進していくべきことについて複数の提案がなされた。そこから、重要なものを抽出し紹介することで、今後の具体的な活動に繋いでいきたい。

1. 都市整備

けいはんな学研都市は 12 のクラスターに分かれていることから、まだまだクラスター間での連携が出来ていない。とくに周辺のクラスターとの連携の問題はテーマとして考えておく必要がある。

また、北陸新幹線が南部ルートに決まり、松井山手付近にも新しい駅が出来ることになっている。精華西木津地区は空

いている土地がなくなってきたが、すべてのクラスターを見てみると、まだ多くの未開拓地が残存している。奈良県域でも開発が始まっており、京都府域では同志社のキャンパス周辺に京都府が 60 ヘクタール、京阪と近鉄が合わせて二百数十ヘクタールの土地の開発に着手することになっている。これらの動向は学研都市のアクセスや立地機関やファシリティの充実に寄与していくものと考えられるが、そこに 30 年後を見据えた街づくりのあり方を組み入れて考えて行かなければならない。

2. 30 年後の社会の在り様

社会の変化を 30 年というスパンで見れば、シェアードコミュニティということが実現されているであろう。その間に人間のライフスタイル全体が非常に大きく変化する中で、限界費用ゼロ社会というのも実現しているはずである。そうなると、この街の中である程度完結した形で仕事ができ、また生活基盤を築くことができるようになってくるはずである。

現在において既にひとつの根源的課題として取り上げられていることに、遺伝子と現在の生活のギャップということが挙げられる。つまり人間の遺伝子は進化の過程の中で飢餓に耐え、そして狩猟して暮らすという遺伝子が組み込まれてい

る。ところが現在の生活はカロリーを異常に摂って運動しないため、かえって健康を阻害する。それは結論的には遺伝子ギャップという問題に立ち還る。これは先進国において人類がはじめて直面するようになった自らのDNAにプログラムされているコードとの戦いであり、これをいかに超克していくかは人類の新たな課題となってきた。

さらに、先端といったものやイノベーションを追求した果てに存在するものは何かということを考えることも重要であり、結局人間がイノベーションを受け入れるということは、自分が幸福だとか幸せだとかいうことを追求していくことである。利便性をいかに実現してイノベーションを成功させ、経済的なものを追求するかということだけを念頭に置くと、これまた方向を誤らせることにもなりかねない。

3. 生活の品質をコミットメントしている街

そうした将来社会において重視されるのが Quality of Life、つまり 30 年後の人類にあるべき生活の品質であり、これをどのように保証していくかということが非常に重要になってくる。この学研都市において生まれてから死に至るまでの人々の生活がどうあれば高い品質を維持している状態ということができ、それに向けた人間としての発達や成長についても街として責任を負っていくような仕組みを持てるようにするにはどうすべきかを設計していくことが肝要である。そ

れには、生まれた子ども、それから成長する小学生、中学生、高校生、大学生、就労している人、高齢者に対しても、それぞれの人生のステージにおいて、この都市では人々の幸せを常に創造する、そのような仕組みをこの街に構築していくことになるのではないだろうか。

そのためには、文化学術研究都市という側面に加えて、目指すべき都市の在り様を、先端幸福創造都市という位置づけにして、これらを達成するためにどのような考え方の下、どのような都市を目指していくのかということを考え、それを社会に訴えていくような進め方も必要となるのではないか。

行政だけではなく、けいはんな学研都市における产学研公民のあらゆる利害関係者が、働き、学び、暮らすを通じて、サイエンスを礎として、30 年後の繁栄に向けて、しっかりした意思を持ってコミットメントし、社会の進歩と人々の安寧と幸福を実現させる都市を目指し、各利害関係者が来るべき変化をいち早く取り込んで、全体調和の下に適応している状態が理想であるという前提に則り、皆が総力で新たな都市を造り込んでいき、30 年後の繁栄をコミットメントしている街というイメージを念頭に置きつつ、街づくりを進めていくことが必要とされるのである。

4. 持続可能な開発目標（SDGs）と親和した街づくり

都市のあり方のひとつの潮流として、

やはり Sustainable なゴールというもの、循環型という考えがある。このけいはんな学研都市においても今後さらに継続的・持続的に反映していくことを念頭に置くと、SDGs を意識した都市づくりとなっているのかが問われることとなる。

けいはんな学研都市の周辺には、限界集落と言われる非常に人口が少なく過疎に陥っている集落が東南部分にあるが、こうしたところも学研都市からみれば農業が周辺にあるということなので、こういう農業の持っているポテンシャル、緑というもの、自然というものが持っているポテンシャルを活用できる余地があると考え、それらを組み合わせた街づくりを行なっていくべきである。

コンパクトシティという概念においても、全ての域内で完全に完結するということは非常に難しいが、近隣のエリアと補完しあいながら域内にある研究開発産業、教育を結びつけることで、大きなネットワークを形成して、人口を維持しながら雇用確保、産業振興、富の流入等々を図るような循環を実現することができるか否かが、将来のこの地域の街づくりにおける一つの重要なポイントとなるであろう。

5. 都市運営のための仕組みづくり

30 年後に向けた都市運営に向けては、シェアードコミュニティとして、府県、市域を越えた、25 万人が暮らす「(仮称) けいはんなシティ」というものを設定し、そこで完結できるものは完結するよう

していくことが必要となってくる。

現状においてけいはんな学研都市としての意思決定や執行が強い推進力のもとに行うことができない一番の課題は、大阪、京都、奈良にまたがっているということ、さらには基礎自治体が複数あるということによりネックになっていることがたくさん存在するためである。本課題を克服するためには、自治体の行政区画を越えて一つのまとまりを持った意思決定機関、一つの特区のような形にして、けいはんな議会のようなものを作り、府県の枠を超えて意思決定をする。そのためには、関西文化学術研究都市推進機構の機能強化や高等研のシンクタンク機能としての強化も必要であり、とりわけ、将来のこの地域の街づくりの在り方をどう考えていくかということについての科学的知見を提供するセンターとしての高等研の機能強化がなされなければならない。

さらには、科学技術や文化を市民が体験できて、しかも自分が決定プロセスに自らが参加できるような街にしていくことも必要である。

6. 長期的・統合的な機能強化の方向性

現状における関西文化学術研究都市推進機構の部隊をより強化して、どのような形にしていくか、それには財政的な裏付けも必要であるが、もう少し強力な布陣を設けて、各府県、それから地方自治体との連携というものを、推進機構自体が主体的にやるという方向感を持つ必要がある。

具体的な実行においては、ある種のミニ議会のようなものが想定されるのであるが、そこに参加されるのは、当然関係する自治体も必要であるが、市民の参加も必要と考えられるし、科学技術を代表するような方々、あるいは高等研のようなシンクタンク等、それらをどう組み合わせていくかということになってくる。そしてその成否は権限をどれだけ持てるかということによる。

関西文化学術研究都市推進機構の機能強化は、機構自身でそういう仕組みを作るのは、さらにはバジェットを獲得した上で高等研のようなところに客員ポストを置き、高等研で引き受けるというのも一つの方法として成立するはずであり、この地域であればこそその可能性がある選択肢として検討していく必要がある。

高等研がシンクタンクとして、機構からの課題を検討していくに際しては、ドクターコースの人の働き場、あるいは紹介場として機能させる努力も必要である。それを誰がどういう風に働きかけてそのための予算を確保するか。企業かもしれないし、国かもしれないし、あるいは地方自治体かもしれないが、その辺のところを徐々に明確にしていくことにより、具体的なスキームが見えてくるのではないか。

7. 情報発信の強化と交流

協議体的なものを積極的に展開してい

くことは重要であり、そこで大切なのは情報発信をもっとやっていかないといけないということではないか。けいはんな学研都市そのもの、そしてその中身、それについてもっと積極的に情報発信をしていく仕掛け、それはもちろん30年後の未来を発信していくことも大事であるし、それに向けて広く議論を重ね、ともに考え、組み上げていくというのも重要な視点である。そのためには、学研に立地する民間企業、公的機関、研究所、大学、関係行政機関、さらには地域住民など、すべての利害関係者間での緊密な連携と交流がその基礎であり、一層の強化を図っていくことが肝要といえる。

さらに人材の流動化をどのようにやっていくかという点についても、それを実現するための仕組みも考えていかないといけない。具体的に高等研が全体をデザインする、あるいは推進機構の機能強化といった時に、情報の発信、あるいは人材の流動化とか交流とか、そういうものをキーワードにして、積極的にやっていけるようにしていかねばならない。

「けいはんな未来」懇談会メンバー

座長

松本 紘 国際高等研究所副所長、理化学研究所理事長

荒井 正吾 奈良県知事

依田 高典 京都大学大学院経済学研究科教授・副研究科長

大竹 伸一 西日本電信電話株式会社相談役

柏原 康夫 関西文化学術研究都市推進機構理事長、株式会社京都銀行取締役相談役

平田 康夫 株式会社国際電気通信基礎技術研究所（ATR）相談役

山下 晃正 京都府副知事

※所属・役職は2018年1月10日現在のものです

専門検討部会メンバー

座長

高見 茂 京都大学白眉センター特任教授

浅野 誠 奈良県産業・雇用振興部産業振興総合センター 生活・産業技術研究部長

池田 一也 京田辺市企画政策部企画調整室長

大原 真仁 精華町総務部企画調整課長

奥田 真行 木津川市マチオモイ部学研企画課長

加藤 博和 名古屋大学大学院環境学研究科教授

北田 守一 生駒市都市整備部次長

小山 宏 奈良市総合政策部参事

坂野 寿和 株式会社 国際電気通信基礎技術研究所（ATR）事業開発室担当部長

高橋 賢藏 サントリーホールディングス株式会社顧問

サントリーグローバルイノベーションセンター株式会社取締役会長

中村 佳正 京都大学学際融合教育研究推進センター長・大学院情報学研究科教授

檜館 孝寿 株式会社京都総合経済研究所取締役調査部長

藤岡 栄 京都府商工労働観光部文化学術研究都市推進課長

村田 崇 奈良県地域振興部部長

山田 武士 NTTコミュニケーション科学基礎研究所所長

※所属・役職は2018年1月10日現在のものです

「けいはんな未来」懇談会

2018年3月

公益財団法人国際高等研究所
〒619-0225 京都府木津川市木津川台9丁目3番地
TEL:0774-73-4001 FAX:0774-73-4005 E-mail:mirai@iias.or.jp
<http://www.iias.or.jp/>
